

---

# 光の巨人に転生したんだが・・・

シャンペン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光の巨人に転生したんだが・・・

### 【Nコード】

N5113W

### 【作者名】

シャンペン

### 【あらすじ】

絶対になかなわないと思っていた夢があるとき叶ってしまった。

それは子供のころからの憧れであり希望であり英雄であり  
いろんなことを俺に教えてくれた人生のバイブルともいえるものだった

そう俺はウルトラマンになったんだ

(この小説には公式とは異なる設定を用いていることがあります)

## よつごそ光の国へ

.....

ここは？

高校から疲れて帰ってきた俺は死んだように  
ベットに倒れこみそのまま寝てしまったはずだった

しかし眩い光を感じて眼を開けて見ると其処には・・・

知らない天井が無かった

其処に有ったのは光に包まれたセカイだった。

何処だ此処は？ こんな場所見たこと無いぞ

.....いや

有る

見たことがあるぞこの光景、

眩い光に包まれたビル群

近未来的な建物

・・そして

道を歩くウルトラマン達

そう

ここは多分だが

M78星雲の中の惑星、通称、光の国  
ウルトラマンが住む星なのだ

何の因果か知らないが

俺は光の国に来たみたいだ

・  
・  
・  
・

いやちょっとそれは違つかもしれない

俺は自分の赤く滑らかな両腕を凝視しながら思った

どうやら俺は光の国へ着たのではなく  
ウルトラマンになってしまったらしい

俺がこんなに落ち着いていられるのには訳があった

その？

俺は特撮が大好きで

子供の頃から特撮好きの父親の影響で  
英才教育とも呼べる、環境で育った  
仮面ライダー、戦隊、宇宙刑事、

そして、ウルトラマン

もちろん小学校のころの将来の夢はウルトラマンだったし  
今でも特撮関係の仕事に尽きたいと思ってる

・・・多分もう無理だと思うが

写真に写るときもポーズはスペシウムだ  
おもちゃやソフビ人形もいっぱい持っている

だからこそ本当の夢がかなった今は  
不安よりこみ上げる歓喜の感情を押さえつけるほうが大変だ

そしてもう一つ理由がある

例えば

漫画のキャラクターになつたとしたら  
そこは安全な場所と言えるだろうか？

どんな漫画だろうと危険に巻き込まれることが多いだろう  
犯罪者からの恐怖に会わないと言えるだろうか？

しかしこの光の国では其れは有り得ない

この光の国では警察が廃止されるほど平和である  
犯罪者など一人も居ないと言っても過言ではない

俺は宇宙一この星は安全だと断言できる

だからこそこんなにも落ち着いていられるのだ

むしろさっき言ったように  
違う意味で落ち着いていられない

ウルトラ兄弟に会えるのか？光線などは使えるのか？空は飛べるのか？

そんな疑問が頭の中でぐるぐる回り

自然と笑いがこみ上げてくる

光の国での生活（前書き）

すみません

転生じゃなくてこれじゃ憑依ですね

それでも気にしないって人は見ていってください



## 光の国での生活

あの後

俺はニヤニヤしている所に

俺の母親（？）に見つかり家へとつれてかれた。

どうやら俺は買い物途中で逸れたらしい

家についた後、少し叱られた

久しぶりに親に叱られてなんだかくすぐったかった

どうやら俺と母親の二人暮らしい

父親は宇宙警備隊の一員だったらしく

どうやら任務中に亡くなったようだった

母は毎日のように父の武勇伝を聞かせてくれた

そして母は話し終わると少し悲しそうな顔をする  
矢張り寂しいのだろうか

俺が宇宙警備隊に入っているのだろうか？

この生活の中で俺に愛情をいっばいくれた  
こっちの母を

俺は人間のときの母と同じように愛している

少しでも心配をかけないように  
宇宙警備隊に入るのは諦めよう

例え警備隊に入ったとしても

母親に申し訳ないように感じるのではないだろうか

そんな気持ちでは多分多くの星を守ることなんか出来ないと思う

いつか母はずっと幸せな顔でいてもらいたいと思う

俺は現在、毎日宇宙情報センターに通っている

宇宙情報センターは小学校も兼ねていて

毎日勉学に励んでいるのである

ちなみに成績はあまりよろしくない

小学校といってもウルトラマンの成人年齢は一万歳近いのである  
何百年、何千年と小学校に通うことになるのだ

教えられる知識の量は半端じゃない

もしももとのこの体の知識を受け継いでいなかったら  
すぐに挫折した所である

しかし成績が良くないけれど  
勉強が嫌いという訳ではない  
むしろ大好きに近い

地球で教えられるような知識のもちろんあるが  
宇宙言語やウルトラサインの使い方  
ほかの星の歴史や文化  
宇宙生物学など

興味が無いものが無いのだ

こんなにも知らない知識を知るといのが楽しいなんて  
人間の時には感じなかったことだった

毎日ウルトラマン80によく似ている先生にわからないところを質  
問しにいたり

情報センターの記録媒体を見たり

知識の海へ毎日ダイブしていった

そうやっていたら段々と成績は伸びていった

今となってはブルー族の子に追い越せ追い抜きの状態である

ウルトラマンになって毎日勉強づけになるとは思わなかったが

結構充実した毎日である

## 休日の過ごし方

休日になるとバスを使ってウルトラコロセウムへ向かう

ウルトラコロセウムとは宇宙警備隊やそれを目指すレッド族の子が

戦闘訓練をするために使う施設なのだ

ここきたのは戦闘訓練をする為ではなく

光線を練習するためである

前にも言ったように俺は宇宙警備隊になる気は無い

だけどウルトラマンになったからには  
光線を出さないわけには行かないのだ！

ちなみに光線を出せるのかと聞かれたら

簡単に出せると言って置こう

やったら出来る、それくらい光線を出すのは簡単だ

出すのはな

問題はそれの威力と命中精度だ

最初に頃に習い（学校で教えてくれる）出したスペシウム光線は

石ころひとつ転がすのがやっとの悲惨な結果だった

基本のスペシウムでさえこれである

応用の八つ裂き光輪やバリアーなんか  
出す事すら叶わなかった

光線を出したことには天にも昇る気持ちだったが

その分ガツクリときた

80 似の先生にコツをしつこく聞いたのはいい思い出である

今となつてはターゲットを正確に狙って木っ端微塵にするのも簡単だ

今日ここにやってきたのは練習もあるが

練りに練って考えた必殺技の試し打ちが目的だ

大体の光線技（手裏剣光線や光弾、拘束光線など）を習得した俺は  
新たに自分で光線技を生み出そうと決意した

多くの失敗作（ファンネル光線やマスタースパーク光線）を乗り越え  
ついに実用化に成功したのが螺旋丸光線である

この技は某忍者漫画に登場する主人公の必殺技をモデルとした光線  
なのだ

ウルトラマンアグルのフォトンスクリューをベースにし改良に改良  
を重ねた

この技は俺の自信作だ

目の前のターゲットに向かい

手のひらで光を光速に乱回転させ

さらに圧縮！！

そして圧縮と回転が限界になったとき発射！！

まばゆく光り輝く俺の螺旋丸光線・・・スパイラルシュートと名づけよう（まんまだが）

ターゲットにぶち当たったスパイラルシュートは

そのままターゲットを消し飛ばし

コロシアムの壁に開放感をもたらした



どせあ？

超満足した俺が周りを見ると

みんな見てる・・・

視線が痛い・・・

やべえ・・・係りの人来たよ

俺は係りの人に奥の部屋へと連れてかれたのだった

## 出会い

新必殺技の試し打ちにある意味失敗した俺は

コロセウムの事務室みたいなところで待たされていた

・・・

心の中を打ち明けるとはつきり言って

後悔と不安で一杯である

母にまた心配を掛けるだろうし

弁償もしなくては為らないだろう

また母に負担を掛けてしまう

調子に乗るとこんな事になってしまうなんて・・・

人間で言えば仙人みたいな年齢になってもまだこんな事を

しでかした俺は思いつき反省していた。

部屋の中が重い空気に包まれていた頃

ドアが開き一人の人物が現れた

「君がコロセウムに大穴を空けた犯人のクロス君だね」

逞しい赤い体、滲み出るオーラ、そして、気高く輝く頭の角

そう！

扉から現れたのはあこがれの存在の一人、  
ウルトラマンタロウその人だった

すげえ！

俺今めちゃくちゃ感動してる！！

「……聞いているのか？」

っは！

「は、聞いてます」

「君があの大穴をあけたんだよね？」

「あ……はい、そうです」

そりゃ拙いよね

穴空けるのは

「すみません」

するとタロウ……

タロウさんは俺の方をじっと見て

「いや私が来たのは其の事ではない」

へ？

「コロセウムは元々訓練のための施設だ、訓練していてコロセウムを壊しても

君には何の責任も無いんだ」

なら、いつたい

「私が君に会いに来たのは、君を宇宙警備隊にスカウトする為なんだ」

は？

「勿論、然るべき訓練は受けてもらう。しかし君は何かが他とは違う私の直感が君はすばらしい戦士になると知らせているんだ」

「そして君はその力の鱗片をたった今見せてくれた。」

ちよ！

「ちょっと待ってください！」

「なんだ？」

「俺の実力を認めてくれて素直にうれしいですし、警備隊の件ももつたないくらいです」

それでも言わなければならぬ

「俺は宇宙警備隊になる気は有りません」

## 才能

「別に警備隊が嫌いというわけじゃないんです

ただ母は俺が幼いころに警備隊に属していた父をなくしていて

それで・・・

俺は母に余計な心配をかけたくないんです。」

「ならなぜ光線の訓練をしていたんだ？」

「・・・えーと、ここは素直に言うべきか

「えっと・・・それは俺の趣味です、新しい光線技を考えるのが俺の趣味なんです。」

やっぱりさ、他の特撮や漫画の技を再現できるかもしれないと思ったらわくわくしてくる



「なるほど趣味か、ではさっきの技は自分で考えたのかな？」

「は、はい、そうです」

そうするとタロウさんは考えるような顔をして

「そうか、わかった。本人にその意思が無いようなら強制はしない

もし、気が変わったらそのときはいつてくれ」

「はい」

タロウはその後、

宇宙警備隊の本部で学校の校長であるゾフィーから

受け取った資料に眼を通していた。

クロス

ウルトラ小学校所属

成績はきわめて優秀、レッド族でありながらブルー族に匹敵する頭  
脳の持ち主である

得意教科は宇宙生物学、惑星文化学

特に太陽系第三惑星、地球の文化に興味がある様子

苦手な科目は格闘などの実践訓練系

戦いをあまり好まない様子、しかし子供オリンピックの光線部門で  
優勝経験あり

性格はまじめで、時々集中して人の話も聞かないこともしばしばあ  
るが

その集中力は教師から見ても眼を見張るものがある

「（なるほどな）」

タロウはこの少年の優秀さに感心していた、

格闘系が苦手など書いてあるがそのことについては大体見当がついていた

タロウが特に注目していたのは光線技のことであった

タロウは自分の実戦経験からあそこまでの光線技使いは類を見なかった

エースやゾフィーを知っていて、そしてコスモミラクル光線という最強の光線技をもつ

タロウである

タロウはその実力や将来性はメビウス以上だと考えていた

「（やはり、彼は必要な存在だ）」

タロウが資料を見ながら唸っているところに人がきた

「どうしたんだタロウ、そんなに資料と睨めっこしていて」

タロウは顔を上げ

「エース兄さん……」

実は宇宙警備隊にスカウトしたい子がいてね」

するとエースは驚いたような顔をして

「タロウがそこまで言う子がいるなんてメビウス以来じゃないか、

少しその資料を私にも見せてくれるか

……すさまじいな

私も子供オリンピックの光線部門で優勝したことがあるがこの記録

は驚異的だ

そうか、この子がコロセウムの壁を壊した子だね」

タロウは黙ってうなずいた

「クロス君か……どこかで……

ッ！

そうか！確かこの子は「

」どうかしたんですか？」

「いや、この子の父親を私は知っているんだよ、そうかあの人の息子が

ならうなずける」

「よっぽどすごい人だったんですね」

「そうだ私の憧れの人でもあった……しかし任務の途中で敵の罠にはまり

仲間を助けるために散つたと聞いている。」

タロウがハツとした表情を浮かべる

「……敵とはまさか」

「異次元人ヤプールだ

「……タロウよこの子のことは私に任せてくれないか」

「わかりました」

親として

いや……

しかしあんなことになるとは思いませんでした。

まさかタロウが出てきて俺をスカウトしてくるなんて

これからは必殺技の開発も自重しないとなあ

俺がこんなに必殺技の開発にのめりこんだのは

前に言った理由のほかにもわけがある

勉強や本を読むことも楽しいのだが気分転換したくなるときがある  
のだ

人間のときの俺ならゲームや漫画をしていたんだが

まあそれがこの星に有るわけが無く

暇をもてあました結果がこれなのだ

・ 本もライトノベルみたいになやつでもあればよかったんだけど……

イッツア文学って感じのしかないし

ウルトラの子供たちは何をして遊んでたんだ？

・・・ああ運動か

そりゃそうか

ちなみに俺は体を動かすのが大嫌いである（空を飛ぶのは好きだけ  
ど）

だから学校の成績もそれ関係が点数が低いのだ

べつに運動音痴ってわけじゃないのだが・・・

では今から俺が何をするのかというと

それは、

ズバリ！強化モードの習得だ



目指すは見た目もド派手なウルトラマンガイアのスプリーム!!

そう!明らかに体格が変わりモリモリマッチョになってテレビの前の子供たちの

度肝を抜いたあれである

しかもそれに見合った圧倒的な強さを見せ付けてくれた

なのでガイアのスプリームは

「投げの鬼」「怪獣終了のお知らせ」「無敗の戦士」などと呼ばれる

ちなみにフォトンエッジ、リキディター、フォトンスクリュー、ア  
グルブレードはすでに習得済みだ

当然だね

フォトンストリームもできなくはないけど、やっぱり強化モードの  
必殺技は強化モードで打ちたい

そこはこだわりなのだ

え？フォトンスクリューは強化モードの必殺技じゃないのかだって？

・・・

V2は強化モードじゃない！！異論は認めない！！

俺はそんなこんなで強化モードの習得にいそしむのだった

そのころタロウと分かれたエースはクロスの母親にたずねていた

「はじめまして、宇宙警備隊のエースです」

「あら、あなたは」

ウルトラ兄弟の一人として名を馳せていたエースは有名だった

「あなたのような人がどうして？・・・どうぞあがってください」

「しつれいします」

そしてエースは此処へ来た目的を話した

「実はあなたのお子さんを宇宙警備隊にスカウトしたいのです」  
すると母はびっくりした様子になり

「うちのクロスをですか？」

「そうです」

エースはうなずき

「あなたのお子さんは大変才能があります

育て鍛えれば優秀な戦士になることが出来ます

それは私が保証します。」

「ですがなぜ突然？」

「それがですね、息子さん、ウルトラコロセウムの壁を光線でぶち破ったんです」

するとさらに驚いた表情になり

「そんな、うそでしょう」

「いえ、本当です

もともと訓練用に建てられたコロセウムはとても頑丈に出来ています

私でも難しいくらいです、それも見たことも無い光線で」

「見たことも無い光線？」

「そうです、コロセウムの記録映像に残っていたあれは

プラズマを超高速の乱気流に形成して圧縮、そして放つという

でたらめな光線でした、

私でもあんなコントロールは出来ませんし

そしてあれは誰かに教えられたのではなく自分で考えたらしいです」

「……………」

「あなたのお子さんは間違いなく天才です」

「……………やっぱりあの人の息子なのね」

「エックスさんですね」

「そうです、あの人も才能あふれるすごい戦士だったわ

「……このことはクロスは？」

「知っています」

「あの子はなんて？」

「断ったそうです、母に心配はかけられない、と」

母は複雑な表情になり

「そう、あの子そんなことをいったのね」

「あの子が幸せになるようにと育てたはずなのに私のほうが心配さ  
れていたのね」

私は母親失格ね

「親が子供を縛るなんてやっちゃいけないことなのに」

「……」

「自分でもわかってたわ」

私の寂しさでクロスのことを縛っていたのは

あの子優しいからこのままだと私から一生離れなくなってしまっ

エースさん

「はい」

「息子を、クロスを立て派な戦士にしてください」

「はい」

入隊・・・か？

・・・・・・・・できね

やっぱり自力で強化モードになるのは無理っばいな

まあ確かにほかの強化モードはすさまじいピンチだったり

ほかから力を受け継いだりしたりしてたしな。

・・・・・・・・他から力を？

ひょっとしたら他からエネルギー貰えばいいのでは？

敵とから攻撃受けたりしたときに

「フッフッフ、お前の攻撃はすべて吸収させてもらった!!」

「ナ、ナンダッテー!!」

「どやあ?」



的な？

……まあ結局ひとりでは何も出来ません

ぼっちはつらいね

エネルギーを吸収できるバリアを開発しとくか……

「ただいまー」

「お帰りなさいクロス

・・・そこに座って」

ん？なんだこの空気は・・・

まずはいすに座ろう、

・・・俺なんかしたっk・・・してる！してる！

コロセウムの壁壊してるよ！

もしかして母にも連絡が行ってるのか？

え、でも怒られるほどじゃないよっな

「先ほどエースさんが此処にいらっしやいました」

「？」

えーす？エースってあの？

「あなた、警備隊員のスカウトを受けたみたいね

直接私に教えてくれたわ」

あ、ああそのことか、すっかり忘れてた。

「それであなた断ったみたいね」

まあ憧れはするけど、

「私はこんなチャンスは無いと思ってるわ」

「いやでも・・・」

「ねえクロス

親にはやっっちゃいけないことがあるの

それは子供を憎むこと

甘やかすこと

そして、子供を縛り付けることよ

親は子供が立派に自分の下から離れていくのを見なくちゃならないの

子供も親離れしないといけないけれど、親も子離れしないとけないの

あなたはもう立派に私のところから巣立っていくことが出来るわ

お父さんもきつとそれを望んでくれるし祝福してくれる

あのひとあなたが警備隊はいるなんて知ったら泣いて喜ぶわ

だから、

警備隊に入りなさい

お母さんやお父さんのことを思ってくれているのなら

あなたにはたくさんに人たちを助けることができるの  
それを私のわがままで不意にすることなんてないわ

「

母の決意と強い思いを受け止めた俺は考えるまでも無く、  
言葉を発していた

「わかった、警備隊に入るよ、そしてお父さんを超える

そうでしょ、母さん」

## 修行開始

宇宙警備隊に入ることを決意した俺は

ウルトラマンタロウと呼ばれ

クリスタルタウンにあるトレーニングルームに来ていた

「よく来たな」

タロウは若干うれしそうに俺を迎えてくれた

「君には私たちが直接訓練することになっている

来なさい」

俺が前に出ると、タロウは手をかざす

すると俺の体は鈍く光り、次の瞬間には俺の体は鉄のよろいが纏われていた

え？ なにこれアープの鎧ですか？

「それはテクターギアという訓練用の鎧だ、君を守る役割と力を制限する力がある」

ですよね。だってこれつけてから体がだるくて動きたくない

「君はもう怪獣などと戦う力は持っているが、過ぎた力は身を滅ぼしかねない

これからはそれを着て修行をするんだ」

そんな！こんな重くて動きづらくて力の抜ける鎧を着たままなんて  
・  
・  
・

「私についていなさい」

え？これからどこに行くの？とてもじゃないけど動けないよ

鉛のような体に鞭を打ってタロウの後についていくと

磁気嵐がひどい荒野のような星につれてこられた・・

あーなんか此処見たことあるなー

俺のこの格好といいこの場所といいすごくデジャブを感じるよ

「此処はk76星、君には此処で修行をしてもらう」



……すごくきつそう

「君は格闘があまり得意じゃないね

私たちはもちろん光線も大事だが格闘も大事になる

暴れる怪獣を体で押さえ込むことも

必要になってくることもある

瞬発力や、敵の攻撃を見極めることも格闘の中で養っていくんだ」

まあ格闘が戦いにおいて重要なファクターなのはわかっているのだが……

なにかいやな予感がする……

「私も君に修行をつけてやりたいがあいにく私は役不足なので」

まさか……

「君にぴったりな人を呼んでおいた」

「タロウ兄さん、こいつが私が修行を受けるのか」

「ああ、そつだ頼んだぞ、レオ」

レオキターーーーーー!!!

つて喜んでる場合じゃない!!

レオの修行がめちゃうくちゃ厳しいのは有名じゃないか!

「名前はクロスだったか

ではクロス

お前の実力を測ってやるっ！

さあ、かかって来い！！」

## 修行開始（後書き）

皆さんの中で一番印象に残っている怪獣は何ですか？

わたしはシーラという鳥の怪獣です

親が取っておいてくれたティガのビデオを偶然見つけた際

ゼルダポイントの攻防を見ました

過ぎた科学の暴走、家族の愛、責任

そして、怪獣になった後にも血を吐きながら主人のことを思い続けるシーラ

私はこの話を何十回と見ていますが涙が流れないことはありませんでした

き・きつい

俺は自分の鼻肩目を考えても光線技は

宇宙警備隊に通用すると思ったた

スカウトもそれが理由だと思ってたし、

たとえレオが相手でも……

レオが光線技があまり得意でないのも知っていた

心のどこかで格闘戦なんていらなと思ったた。

ウルトラマンの戦いを見ていて思ったことは無いだろうか？

なんで最初から光線打たないのだろうか？

この言葉が表していた、俺は格闘をなめていた

もともと人間だった俺が、

近づかないで、光線を撃っていれば

もしかしかしたら？

勝てるんじゃないか？、

素人でもわかる、戦いの基本、リーチの差

つまり、あたらなければ問題ない

レオでも大丈夫じゃないか？

その考えがまさに大甘！！

そんな考えていた自分を殴りたい

格闘がいらない？

馬鹿か！！そんなわけ無いだろう！！

レオでも大丈夫？

ふざけてるのか！！俺は！！

レオにあまりにも失礼だ！

相手は、光線が苦手というわけじゃないんだ

格闘で



格闘という自分も傷つく方法で、

地球で大切な人を失いながらも戦いきった伝説の戦士だぞ!!

アホか俺は!!

警備隊にも通用する?

そんなわけが無かった

俺の光線を切り裂きながら飛んでくるレオキックに

ぶっ飛ばされながら

俺は実感していた。



き・きつい（後書き）

これが私の子供のころに感じていた

なぜ光線を撃たないのか？

これがその答えとして導き出したものです。

暴れる怪獣を己が身をもって止め守る

安全なところで光線を撃って倒す、そんな戦い方では

本当に守りたいものを守れない

そう思いました

無理無理

さて問題です。

怪獣の角や星人の武器などを意図も簡単にへし折る

ハンドスライサーを

腕で受け止めるとどうなるでしょう？

答え、腕がもげるほど痛い

テクターギアは俺の体を守ってくれてるみたいだけど

少しだけありがた迷惑というか……

もう腕が取れたほうが痛くないんじゃないか？

とか思ってしまう今日この頃

テクターギアはとても便利

だって俺がどんな攻撃を受けても俺の体を守ってくれる

んだけど

・・・・・・・・死ぬほどいたい

レオキックとか食らうと、息が出来なくなる

脳みそが息の吸い方を忘れたみたいな

結構年をとったはずなんだけど

恥ずかしながら悶絶してしまった

声にならない叫びを出しながら転がりまわった

さっきまでは偉そうに後悔とか反省とかしてたけど

食らった瞬間頭真っ白になった

・・・・・・・・俺ってそんなもんだよね

「どうだ、クロスは」

「タロウ兄さん

……天才ですよあいつは

テクターギアのつけ始めで光線をうつことが出来ました

俺でもそんなこと出来なかった、

あいつはなんでもないようにしているが

あの鎧の力を制限する力は生半可じゃない

楽しいな、あいつが成長していくのを見ているのはな

「おまえ、セブン兄さんに似てきたな」



「..が..し..ん..」

地球へ

レオとの修行にも慣れてきて

このごろレオとの手合わせが楽しくなってきた頃

レオが俺を呼び出した

「どうしたんですか師匠？」

………もしかしてまた怪獣がうじゃうじゃいるところか

俺を放り込む気ですか？」

シヌカトオモッタ

「いや今度の用件は違う

詳しくは大隊長のところでは話す。」

なにやらもつと真剣なお話の様子

不思議に思いながらもレオについていき

ウルトラの父の元へ行く

「君がクロスか、話は聞いている」

相変わらず立派な角だ

それにしても俺に何の用だろう？

「君に来てもらったのは他でもない

君に地球へいってもらったためだ。」

へ？

「へ？どうして俺が地球に？」

この前メビウスっていう先輩がエンペラ星人を倒して平和になったって

聞きましたけど？」

そうだ、もう地球に怪獣が現れることは無いだろう

ウルトラギャラクシーでは絶滅しているとまで言われてたし

「そのとうりだ、しかし大変なことがわかった」

大変なこと？

「お前ならこの怪獣を知っているだろう？」

此処まで口を開かなかつたレオが資料を俺に渡しながら言った

これは……

「四次元怪獣ブルトン……」

まさか！

「察していると思うがその怪獣がついさっき地球へ飛来した」

「お前の任務はブルトンの討伐だ」

このままにしていると地球は怪獣で埋め尽くされてしまってもおかしくないだろう」

たしかにウルトラギャラクシーの元凶はこいつだった

これはまずい・・・

でも

「なぜ俺が？」

選ばれた理由は？

「タロウやレオ他にも多くの戦士に君の話を聞いているし

私も実際に見ている

君になら地球を任せられると思った」

へえー

「お前内心とても喜んでるんじゃないか？」

結構な地球マニアだと聞いているぞ」

地球マニアって・・・

「それと

君には私からプレゼントがある」

そういつて俺に手渡す

「これは……！」

地球へ（後書き）

ちり何でしょいっ..





そもそも感激です

「お前、泣かなくてもいいだろ」

あまりの感動で眼から熱い汗がでてきてしまった

「長くつらい任務になるかもしれない

だが君も地球で多くの経験を得るだろう」

「はい！がんばります」

「ウム」

ミライ君がエンペラ星人を倒し、その残骸を壊してから約十年がたった。

僕は医者として勤務しながら

CREW GUYSとしての経験を

後輩に教える教官のような仕事をしていた

多くの侵略者や怪獣に襲われた地球、そして日本

その被害はとてつもないものだったけれど、

宇宙船やロボットから取り出したオーバーテクノロジー、

Much Extreme Technology of Ext  
rather restrial Origin、

通称メテオールが活躍した。

不明な点や不安定だったところが多く使用が制限されていたけれど

着実に解析は進み、多くの利益をもたらしてくれた

なんだか複雑な気分だけどね

リュウさんは今でもCREW GUY'Sの隊長としてがんばってる  
みたいだ

あの熱いところはいつまでも変わらないなー

僕はまだ知らなかった

また地球が魔の手に脅かされることに



番外編 まだ見ぬ進化へ

これは俺がまだレオの修行を受けていたときの話

「がんばっているみたいだな」

！？

エースだエースがいる!!!本物だ!

「はい！」

・・・あれ？師匠は？」

「今日は私と模擬戦だ」

え？

「テクターギアをつけ続けるとはずしたときに

今まで押さえがあった力が解放され制御できなくなることがある

定期的に自身の力に慣れ、また確認することも大切なのだ」

なるほど、それで

「ではテクターギアをはずして見たまえ」

.....?

これははずせるの？

っていつかどうやってはずすの？

ゼロはこれ吹っ飛ばしてはずしてたよね？

なら

「どうした？まさかはずし方をおそw「ズアアッ」なんだと？」

よしはずれた

エースが困った表情をしている。

どうしたのだろう？

「どづしたんですか？」

「……いやなんでもない

それよりどうだ力のほうは？」

いわれてみれば………おおおお

前よりも圧倒的に、なんかこう力が漲る！

この状態ならもしかして？

「あのエース教官」

「どっした？」

「割と本気で俺に光線を撃ってもらえませんか？」

「………」

力の確認で来たのだからな

君がそんなに言うのなら、やっつけてやるっつ



「はい！お願いします！」

そしてエースは多分メタリウム光線を打つ準備に入った

「いくぞ！」

よし、このタイミングだ！！

メタリウム光線の前にエネルギー吸収シールドを構成

メタリウム光線を吸収する

お？お！おおおおおおおおお

キターーーーーー

なんか姿は微妙にしかかわんなかったけど（金のラインが体に刻ま  
れたくらい）

強化フォームに成れたぞ！！

テンションあがってきたあああああああ

「なるほど、光線のエネルギーを吸収s」最高にハイってやつだぜ  
！！」大丈夫かクロス？」

宇宙キターーーーーー

ウエフ、ウエヒヒWWW

まじ気分さいこうー！

俺最強じゃね？まじで？てゆうかむしろ俺以外にふさわしい人がいるだろうか（キリッ

超何でも出来そう、っべー、まじっべーWWW

foooooooooooooooooooooooooooo

「失敗したみたいだな」



番外編 まだ見ぬ進化へ（後書き）

エネルギー酔いという症状がきつとあるはず!!

## 接触

僕が後輩たちにする

今日の講義も終わり帰る途中、

出発準備をしているリュウさんに会った。

「お、テツペイじゃねえか、そうか今日は講義の日だったな」

「そうなんだ、ところで今日はどちらへ？」

「ああ、先日地球に隕石が落ちたんだ、しかしそれを調査しに行つた人が行方不明らしい」

俺が行くのはその人たちの行方と真相の解明だ」

まったくこの人は

「リュウさんは隊長なんだから、そういうことは他の隊員に任せればいいのに」

「俺にはサコミズ隊長みたいなことはできねえよ

いつも現場にいて他の隊員に指示を出すほうが生にあっているんだよ」

「まあそんなことだろうと思いましたよ」

「じゃ行ってくるわ」

「行つてらっしゃい」

ブーブーブー…!

いきなり警告音が鳴り響く

どうしたんだ？

「びびりました…?」

リュウさんが指令室に連絡を取る

『地球に巨大な宇宙生命体が多数接近しています！』

すでにGUY'S スペーシーがシルバーシャークGなどで撃墜しています

地球に飛来する可能性が高いです。』

「怪獣の情報は？」

『ドキュメントに記録があります』

宇宙斬鉄怪獣ディノゾールです！』

ディノゾール！いったいどうして？

「何で今になってディノゾールが来たんだ？」

それは

「またこの星に危機が迫ってるんじゃないでしょうか」

するとリュウさんは

「かもしれねえな、おい聞こえるか？」

各員戦闘配置に付け、シノザキ、タマガワはガンローダーとガンブラスターで出撃

俺もガンウィンガーで出撃する、ディノゾールに備えるぞ」

『『了解』』

「悪いがテツペイ、司令室に行ってくれないか？」

お前がいると心強いしからな」

「わかった」



ミライが去ってから数年たって、何で今日になってディノゾールが？

リュウはガンウィンガー操縦しながら考えていた

また地球になにがおきてるんだ！

## 脅威

『G U Y S スペーシーからの報告です！』

現在確認できたところ、一匹を除いて撃墜しました

その一匹はまもなく飛来します！』

「多くのディノゾールを落とせたのか

G U Y S スペーシーもやるじゃねえか

シノザキ、タマガワ、俺たちが最後の一匹を撃墜するぞ」

『了解』

いた！

「ディノゾールを肉眼で確認、

攻撃する！」

『！？』

『新たに怪獣出現！！』

なんだと！

「どー！？」

『後ろです！！』

な！？

「なッぐわ」

『隊長！！』

司令室で状況を把握していたテツペイは驚愕していた

なんで・・・

「どうしてタイラントが！」

「いったいどこから！」

そこには暴君怪獣タイラントがいたからであった

それにリュウさんが撃墜された！

『デインゾール接近中』

『攻撃を開始します！』

！？

「だめだ！ディノゾールの舌による攻撃はメテオールを使用してないと避け切れない！」

『しかし！』

そんなときだった

『G U Y S    スペーシーから通信

！新たに宇宙から飛来する物体を確認

すごいスピードです！

しかもこの反応は・・・』

ハイヤアアアアアアアアアア

次の瞬間ディノゾールは赤い流星に貫かれ爆散した

## 初戦闘

くるときにいろいろ有ったが・・・

やっと来たぜ我がふるさと地球！！

いやあ久しぶりだな

あれ・・・なんだあのディノゾールの群れ

多いなあ

あつても地球の人工衛星がほとんど打ち落としてる

すげえ

あの数のディノゾールを打ち落とすなんて

でも一匹残ったるみたいだ、このままじゃ地球に

いってしまふな

よし、俺がやろう

俺が地球を守ってみせる！

人工衛星に間違っ  
て撃たれないに  
すさまじいスピードで地球に接近  
していく

おおおおおおおお



落下のスピードで師匠直伝のレオキックをぶち当ててる

ハイヤアアアアアアアアアアアアアアアアア

.....勢いあまってぶち抜いちゃったけど

結果オーライ！

ディノゾール！

おめえの出番、ねえから！！

ディノゾールを倒し

地球の大地を久々に踏んで余韻に浸っていると

とてつもない気配を感じた

あれ………

何ゆえタイラントがいるのでしょうか？

そうか、ブルトンか

おのれブルトンー！

というかいきなりタイラントとかハードすぎるなあ

でも、

負ける気は無い！

距離を詰めて一気にとび蹴りを食らわす

ッ、かてえー

さすがに硬いな、さすがタイラント

というかアブないよ、このバラバの腕、ぶんぶん振り回してくる

師匠との組み手に比べると、回避するのは簡単だけど当たると

ツ痛い、受けも通用しないのかよ！

でたらめだな、

しばらく接近戦をしているとタイラントが炎を吐いてきたので

いったん距離をとる

次くるのは多分……

タイラントは耳からアロー光線を出してきた

………やっぱり

相手のことを知っているのは大きなアドバンテージになる

シールドを展開しながら俺は考えていた

このタイラントに勝つ方法を・・・

暴君怪獣タイラントは知名度も高く最強クラスの怪獣なのだ

あの強固な体は生半可の攻撃じゃ通用しない

だったら

俺は距離を詰めて攻撃を回避し

渾身の力を込めたハンドスライサーで

タイラントの角をぶった切った

よしこれなら・・・

距離をとり、体に光を貯める

本能で察知したのだろうタイラントはゆっくりとこちらに体をむけ

こちらが光線を撃とうとした瞬間、胴体の口を大きく開いた

やっぱりね、

タイラントの胴体であるベムスターがエネルギー吸収能力を持つて  
るのは

とっくにご存知なんだよ！

体に光を貯めて光線の構えをしたのはフェイク！！

本当の狙いは……

俺から放たれたのは光線ではなく頭頂部からノーモーションで放た  
れたアイスラッガー

光線を飲み込もうと大口を開けたタイラントの

腹の中に吸い込まれるようになっていった

体内から切り裂かれたタイラントは大きな断末魔を上げ

爆散した



## 初戦闘（後書き）

強い敵の簡単な倒し方、

弱点を突く

## 新しい光

あれは・・・

ミライ君ではないみたいだ・・・！？

『各機、隊長の救助へ向かってくれ』

『ですが！』

『メテオールなしで怪獣と戦うのは不可能だ  
救助を優先してくれ』

『了解』

「いまはあの巨人に任せるしかないのでしょうか？」

たしかに

「しかし相手はあのタイラントだ」

「ご存知なんですか？」

あつドキュメントに記録が……!？」

なによこれ、この怪獣でたらめじゃない!」

「そう相手は暴君怪獣タイラント

シーゴラスの頭、イカルス星人の耳、ベムスターの胴体、バラバの腕

レッドキングの足、ハンザギランの背中、キングクラブの尻尾

怪獣の強いところで作られた最強怪獣だ、ウルトラ兄弟を倒したこともある」

だが彼は臆せず飛び掛って言った

!？」

やっぱりあの技は

「レオキックだ!」

だけど

「あの技・・・さっきディノゾールを倒した技ですよね

効いてるようには見えません」

やっぱり強い

接近戦になったが両者とも一進一退、ただど

タイラントが火を吹く

「巨人も負けてませんね」

「でもダメージはほとんど入ってないよ」

!?

イカルス星人の耳からアロー光線も放てるのか！

彼はシールドを張ることでそれを防ぐ、まるでくるのがわかってたみたいだ

彼はそこから一気に距離を詰め

攻撃を避けたところで飛び掛りチョップで角を断ち切った！

「あれはハンドスライサー！彼はレオの技が使えるのか！？」

タイラントから距離をとる

もしかして光線を放とうとしているのか？

「まずい！」

胴体部分のベムスターの口には光線を吸収する能力があるんだ

いま光線を放つたら格好の餌食だ！

彼は光線を……放たなかった

光線がくるとベムスターの口を大きく開けていたタイラントに  
吸い込まれるように入っていったのは光線ではなく

彼の頭頂部の突起だった、

あれはアイスラッガーだったのか

「光線はフェイクで

あのベムスターの口にピンポイントで

アイスラッガーを打ち込むなんて……」

不意の攻撃を食らい爆発するタイラント

確かにタイラントの強固な体には並大抵の攻撃は通用しない

弱点といえばあそこしかない

だ  
け  
ど

な  
ん  
か  
ま  
る  
で  
一  
度  
戦  
っ  
た  
こ  
と  
の  
あ  
る  
よ  
う  
な  
戦  
い  
だ  
な  
あ

## 新しい光（後書き）

いいいいいやほおおおおおつっつっつ

ランキング51位に入ったぞー

どれもこれも皆様のおかげです！！

本当にありがとうございます、

思えばウルトラマンの小説がランキングに入らないな

なら俺が入れよう！！

という感じではじめたものでした

本当にうれしくて小躍りしちゃいましたwww

では記念として登場させたい怪獣または宇宙人の

アンケートをとります。

一番多かった怪獣、宇宙人はストーリーに出します！！

本当にありがとうございます！！



番外編 隊長（前書き）

ランキングに入ったお祝いの番外です

え？早くストーリーを進める？

.....

がんばるよー！！

## 番外編 隊長

これもまたレオ師匠の修行を受けているときの話である

「あー、体中が悲鳴を上げているわー」

その日のノルマを消化し休んでいるときのことである

「君がクロス君だね、直接あつたことは無かったね、はじめましてだ

宇宙警備隊隊長のゾフィーだ」

.....

普通の俺なら此処でテンションが上がっていたらろう

ジャックや初代マンだったら有頂天である

でも今日の前にいるのはゾフィーなのだ

そう、ゾフィー

別にアンチというわけでもなく

一特撮ファンとしてゾフィーを馬鹿にしてるわけではない

.....

だがあまりいい印象を受けていないのが本音だ

2ちゃんの評価を真に受けるわけではなかったが

ゾフィーの強さなどには疑問を持つところが少くない

何の因果かウルトラマンになり

ウルトラ兄弟の戦闘記録は腐るほど見たといってもいい

何せいくらでも超高画質でシリーズを全部見れて戦いの参考になるのだ

まさに一石二鳥

しかし疑問が残る点があった

それはウルトラマンの最後の戦いのゼットン戦  
など

何かが違つところがあった

ウルトラマンの最後は

ゼットンに敗れたウルトラマンに変わり

地球の人間が自身の力でゼットンを打ち破り

これからは私たちが自分自身で地球を守っていく

という内容だったはず

だが記録映像にはゾフィーが颯爽と現れ

ゼットンを倒してしまった……

「私の顔を見て、どうしんだね？」

「つかぬ事お聞きしますが、隊長は本当にゼットンを倒したんですか？」

「(ドキッ) ははっ

何をいきなり、そうか記録映像のことだな、あれでの経験の話を聞きたいということかな？」

「いえ、たしかゼットンは地球人の新兵器で倒されたのでは？」

「(あせっ) 何を言ってるんだい、確かに私が自慢の光線でしとめたのさ」

「あと、地球の怪獣であるバードンの記録映像が極端に短いんですけど」

「(ドキッ) それはタロウが簡単にしとめてしまったからさ」

「後、宇宙暴君タイラントのk」あっそうだ、君の師匠であるレオに挨拶に行かないとね

その話はまたどういふので「そいひですか」

・・・

俺の中のゾフィーはもう・・・

そのあとレオ師匠とタロウ教官にめっちゃくちゃ怒られた

ゾフィーを瞬殺したタイラントを

俺が弱点を攻撃したけれども倒してしまつのは

もうちょっと後の話になる

番外編 隊長（後書き）

ゾフィーエ……………

登場させたい怪獣アンケートはまだまだ募集中



選択（前書き）

今までのウルトラマンではありえなかったことを

この小説では、やります

## 選択

俺は地球に行くことになって

ひとつの選択を突き付けられていた

いや・・・本当は

本来ならばこんな選択はしない

この任務だからこそその選択肢

それは・・・

最初から自分がウルトラマンであることをばらすことである

そう本来はそんなことは絶対にありえない

歴代のウルトラ戦士は、

調査や怪獣を追って地球に来た

違う場合ももちろん有るが最初からウルトラマンをばらした戦士は  
いない

なぜか？

一番の理由は、人間と融合したからだろう（しない戦士もいるが）  
本来のその宿主の生活を壊さないためであろう

まあほとんど科学特捜隊みたいな組織に入るため

融合しながら日常生活を送ることは無いが……

そして、真実、本当の理由

それは迫害を避けるためだ

……

もともと俺は人間だ、

長い時間ウルトラ一族としてすごしてきたが、

人間のときの価値観や考え方を捨てたわけじゃ無かった

迫害、差別、

人間はそういう生き物であることは自分でわかっている

そりゃあ、歴代の戦士が守ってきたように地球は守る価値がある

だからこそ

おれもこの任務を快く承諾したんだ

俺は人間と融合する気は無い

正直、任務の内容としてはばらしたほうがよい

ブルトンの討伐には人間側の協力が不可欠

テンプレである

異常事態発生

怪獣出現

人間が頑張る

が、駄目！

ウルトラマン登場

解決

これらを俺は待つことが出来ない

人間が頑張る、という過程がはつきり行って無駄

ブルトンがいる星でこんな悠長なことをしていたら

あっという間に怪獣王国である

俺の場合は

異常事態発生   ブルトンの仕業   最優先で潰す

怪獣出現

俺登場

解決

こうしなければはっきり行って間に合わない

これがばらす大きな理由だ

だからこそ俺はばらす選択を選んだ

## 接触

『隊長の救出に成功しました!!』

しかし容態は深刻です!』

リュウさん!

いや、僕が此処で冷静じゃないと!

「至急、病院へ運んでください」

『了解』

「クゼ教官!」

ん?

「どうしたんだ?」

「先ほどの巨人ですが一直線に向かってきます!」

こちらに接触する気なのだろうか?

「一応警戒しておいてくれ

でもあんまり必要ないかも」

「そうですか!？」

「ああ、僕は直接あの巨人に会ってくるよ」

「どうしてですか？」

「彼は明らかに僕たちに用があつてきているんだ

今回の怪獣の件についても何かわかるかもしれない」

僕は司令室をでて外へと出て行った



俺はフェニックスネストの目の前に立ち

人間の大きさへと縮んでいった

人間大になり、向かっていくと中から警備員が出てきて

俺に銃を向けた

こればかりはしかたない

覚悟していた

おとなしく両手を挙げ

向かうと

「ちょっと君たち!!」

なんで銃を向けてるんだ

早く銃を下ろしなさい!!」

警備員をどかしてこっちに向かってきたのは

まさか・・・

「はじめまして

ようこそ地球に

僕の名前はクゼ・テッペイ

よろしくおねがいします！」

やっぱり！

歩く怪獣ずかんゲブンゲブン

テッペイ隊員じゃないですか

メビウス先輩からも地球へ行く前に紹介を受けていた

「歓迎ありがとうございます

まあ銃を向けられたのは予想してましたよ」

「さっきのタイラントのこともお礼を言います」

「いいんですよ」

地球を守るためですもの」

そして此処に来た目的を告げる

「テツペイさん、私が此処に来た理由をしてほしいと思います」

これは今回の怪獣の出現に大きく関係しています

とても重要な話です」

## 現状説明

言い方は悪いが

あのあと俺は警備隊に連行されて

会議室のような場所につれてかれた

「JJJJ」

説明するのかな？」

テッペイしかいないけど

「ああ大丈夫、モニターに主要な人物はオンラインにしてある

なにぶんいきなりだったからね

でも大切なんだろう」

心から感謝します

「それでは

俺がこの地球に来たわけを説明します

俺が地球にきた理由はまた地球に危機が迫っているからです」

『また地球に危機が』

「事の発端は地球に飛来した隕石です

地球に飛来した隕石の正体がこれです」

俺はモニター越しにも見えるように壁にプロジェクター光線を放った壁にブルトンの姿が映し出される

「こいつは!？」

テッペイ隊員は知ってるみたいだ、さすが

「この怪獣の名前は四次元怪獣ブルトンといいます

名前のとおり四次元生物なのでこちらの常識は通用しません

そして厄介なのが

「この怪獣はどこからでも怪獣を呼び出しますのです」

「そうか！それであのタイラントはいきなり出現したのか！..」

「そのとおりです」

「それで俺の任務の内容はブルトンの討伐だったのですが・・・

ちよつと厄介なことになりました」

「やっかいなこと？」

『どづいうことだ？』

「先ほどそちらの人工衛星が多数のディノゾールを倒しましたよね」

「そ、そうだけど」

「そこなんです、

ディノゾールは宇宙から来たんです

ブルトンに次元を超えて呼ばれたのではなく」

「ブルトンに呼ばれたんじゃない・・・

だとすると」

「そう、また別にディノゾールを宇宙から呼んだ怪獣が

おそらくブルトンの仕業で呼び出されたのでしょう」

「ディノゾール・・・怪獣を呼ぶ怪獣

まさかー!」

「そう、そのままかです」

「この地球に再び高次元捕食体ボガールが

現れた可能性があるんです」



## 疑惑

『少し質問をいいかい？』

画面の向こうからの声に言葉を返す

「いいですよ」

『すこし自己紹介させてもらおうよ』

私は国家安全保障委員会の委員長をやらせてもらっているタナカ  
という』

お偉いさんのタナカさん

『あなたの名前は？』

「クロスです」

『それじゃクロスさん』

あなたの話が本当ならば由々しき事態だ

すぐにでもあなたと協力体制になって、この事件を解決するのが  
急務だ

だが、

たとえあなたたちが何度もこの星を守ってくれているとはいえ  
すぐにあなたの話を信じることは出来ない』

やっぱりか

『それでも私は地球外生命体が起こした事件に詳しい

この地球に侵略してくる宇宙人は狡猾で賢い

あなたたちウルトラマンの姿を模して現れた宇宙人もいないわけ  
じゃない』

ザラブやババルウ星人のことだな

つまりはタナカさんはこう疑っているわけだ

いままでのことはすべて自作自演

俺は侵略目的に来た宇宙人だと

「ちょ！ちょっと待ってください

クロスさんはさっきだってタイラントから地球を」

「それも全部自作自演、すべては信用させるため、

そうおっしゃりたいんですね」

『まあはつきり言えばそうだ』

「だったら僕みたいなたとえウルトラマンでも

地球での知名度が無い俺より

メビウス先輩みたいに地球での活躍が知れ渡っている方に化けた  
ほうが

効率がいいと思います」

『そういわれれば、そうだな』

だがそれだけの理由では信用できない

こちらの勝手な都合ですまなかつたとはおもっているが

あなたにはこちらの監視下にいてもらう

人間に姿を変えることが出来るのは知っているがそのままの姿ですごしてもらおう

あの怪獣を倒してくれて感謝もしている

しかしこれが私の仕事なのだ

あなたの情報から事態が解明でき次第、協力を要請しよう』

「そんな!」

『仕方ないのだクゼ教官』

このことが真実でも嘘でも、またこの地球に怪獣が出現したことは変わらない

私たちは慎重にならざるおえないのだよ』

「ですが」

このひとはやっぱりやさしいんだなあ

「いいんですよクゼさん

俺も薄々こうなるだろうと思っていました

タナカさん俺の話信じるか信じないかは任せます

ですがそちらも早くに決断をしなければならぬ状況です

ブルトンが怪獣を次々呼び出し、その星を怪獣だらけにすることは

多くは無いですがあります

ですが、呼び出した怪獣がタイラント、予測が間違っていないければボガール

はつきり言って異常です

この怪獣たちは一体で星を壊滅にすることが出来るほどの強さです

この後もこのレベルの怪獣をバンバン出されたら俺でも勝ち目がありません

もちろんこのレベルの強さでなくても怪獣が出現すれば大きな被害が出ます」

タイラント十体が一気に出てきたら間違いなく終わる

異世界とはいえスフィアや根源的破滅招来体、カオスヘッダーがないともいい切れない

『わかっている

どのみち我々人類は再び大きな脅威にさらされることになるだろう

それは断じて防がねばならない！』

番外編 愚痴（前書き）

ちよつと早めに更新つと

番外編 愚痴

クロスがタイラントを倒し、ガイズに突撃しているころ

タロウはクロスが実戦で戦えたことをウルトラサインで知り

師として弟子の成長に安堵していた

そして、もう一人の兄弟子である

メビウスに会いにきていた

「メビウス、久しぶりだな」

自分の恩師であるタロウを見て驚いていた

「タロウ教官!!!」

ウルトラ兄弟に仲間入りしても

つい癖で自分のことを教官と呼んでしまうメビウスに

タロウは苦笑していた

「もう教官とつけなくてもいいといったのに」



「いやっやっぱり体に染み付いた癖というのはなかなか抜けなくて・  
・

それで、今日は一体どうしたんですか？」

「いやな、お前の弟子に当たるクロスは知っているだろう？」

「はい、クロス君には地球に行く直前に会いました

彼はもともと地球のことが大好きでしたから」

「そのクロスが先ほど地球に到着し初戦に勝利したようだ

それで、少しほっとしている

それでかつてのお前を思い出し会いに来たのだ」

「僕の地球での最初の戦いは酷い物でした

周りのことを考えず被害を大きくしてしまった

その点はどうでしたか？」

「その点は私とレオが厳しく指導したから問題なかった

お前の最初の戦いの相手であるディノゾールとタイラントを難なく倒していたよ」

それを聞いてメビウスは驚く

「タイラントってあのタイラントですか!？」

「そうだ、ウルトラ兄弟を次々と破った暴君怪獣タイラントだ

やはりあの子は天才だ、お前の才能も頭ひとつ飛びぬけていた

私もそれを見抜き育てお前は自慢の立派な光の戦士になった

だがあの子はまたひとつ次元が違うのかもしれない」

「兄さんをそこまで言わせるなんて

どんな戦いをしたんですか？」

タロウはクロスの戦いをメビウスに見せた

「これは・・・」

「私がタイラントを倒せたのは兄弟たちとの戦いでエネルギーを消

費していたからだ

それでもタイラントの強固な体を貫くためにタイラントの武器を利用して倒した」

「ですがクロス君のこの動き」

「そうだ、記録室で毎日のようにウルトラ兄弟の戦いを研究して

このタイラントでさえ知り尽くしたクロスだからこそ出来る

この光線をフェイントにしたブーメラン攻撃はまるで

次の攻撃を予知しているかのような動きだ」

「すごいです、僕でも此処まで完璧には立ち回れない」

「……すこし心配なところもあるがな」

その言葉にメビウスは不思議に思う

「そうですね？

実際会ってわかりますが、彼は地球を愛してるし

強さだつて申し分ない、兄弟に名を連ねるのもそう遠くないとも  
思います」

メビウスの絶賛にタロウは深くうなずき

「それは私がよくわかっている

問題はそこじゃない」

メビウスはさらに不思議に思い

「では何が心配なのですか？」

タロウは大きくため息を吐き答えた

「・・・・・・・・」

クロスがまだレオに修行をつけてもらっているときのことだ

私やレオが手塩にかけて育てているあいつにゾフィー隊長が興味  
を持ったんだ」

「隊長がですか？」

「そつだ、隊長はクロスに激励を飛ばそうとしたんだろう」

隊長はクロスに会いに行った

クロスは何をしたと思う?」

「?」

「ゼットンとの戦いやバードンとの戦いのおかしいところを直接本人に聞いたんだ」

「.....」

メビウスはそれを聞いて血の気がサーッと引いていくのが分かった

「そ、それは本当ですか!？」

すこしどもりながらメビウスは聞いた

「ああ、本当だ私としては気が気じゃ無かったよ」

「……それで？」

「ああ隊長も私たちが大切にしていることは分かっていたのだろう」

クロスには私たちから言っておけといわれたよ

……だがあいつは隊長の戦いの記録の矛盾点を

まるで宇宙風を見つけるように発見してそれを私に言ってくるんだ

私は必死にあいつを説得するんだがそのたび

胃がきりきりと痛くなるんだ」

「……」

「それで今回タイラントをあいつは倒してしまった

あいつが光の国へ帰ってきたときに

私に何を言い出すか怖くて仕方が無い」

メビウスはこのとき師であるタロウの途方も無い苦勞を知ったので  
あった

**番外編 愚痴（後書き）**

ウルトラストレス性胃潰瘍

あると思います！



交代（前書き）

ちょっと遅れました

## 交代

テツペイはガンウィンガーで墜落したリュウのお見舞いに来ていた

「おおテツペイじゃねえか」

フルーツの盛り合わせを持って病室に入ってきたテツペイにリュウは呼びかけた

「もう、心配したんですからね

これお見舞いです」

リュウに果物を渡す

「何かわりいな」

「いいんですよ

それで体のほうはどうなんでしょうか？

「こうやって見るととても元気そうですけど」

するとリュウは深刻な顔になり

「こうして喋る分には問題ないが、体中ボロボロだ」

「大丈夫なんですか!?!」

「ああ完治してリハビリするまで時間がかかるが命に別状はねえ  
だがな……」

リュウは顔を下に向ける

「俺は当分の間前線にはでれねえ

…… テッペイお前に頼みがある」

「なんですか？」

「俺の代わりに隊長をしてくれないか？」

「え!？」

テッペイは驚いた表情になる

「この体じゃGUY'Sの隊長のままではできねえ

「だけど、お前なら俺の代わりにちゃんと隊長としてガイズを纏め  
られる」

「……」

「他の隊員から今回の話は聞いている

また地球が危険に晒されるんだろ？

だったら足手まといな隊長なんて要らない

他の奴でも隊長はムリだろう、だがお前は別だ

講習を通して隊員とも面識が有るし、お前なら安心して任せられるんだ」

「リュウさん……。」

「本来なら医者の仕事もしているお前にこんなことは言いたくねえ  
だが事態が事態だ

早くにGUY Sを纏められる隊長が必ず必要になってくる」

「分かりました」

「いいのか？」

「はい」

「そっか悪いな」

「リュウさんさっきから謝ってばかりですね」

「かもな」

地球に来たわたくしクロスは

絶賛監禁中です！

・・・暇だ

この姿になってから色々あって

目まぐるしくすごしてきたからこういう時間は久しぶりだ

まあ俺の警戒と事態の調査が終わるまで

こんな感じかな

・・・たしかメビウス先輩

サイバー空間に入ってゼットン倒してたよな

俺も頑張ればネットに入れるか？

ネットなんて久しぶり所じゃないな

お気に入りのサイトが此処にもあるのか気になるし

正直ネットのセカイで生活できるって天国じゃね？

監禁中にネット接続を試みる俺

このことがまたも事件を引き起こしてしまっただが

それはまた別のお話

## 蟻地獄（前書き）

なんか題名で何人かは出てくる怪獣が悟れてしまつと思ひます  
そのくらい私にとつても印象に残っている怪獣です

## 蟻地獄

代理ということでは有るが

G U Y Sの隊長になった僕は隊員とミーティングをしていた

「此処にクゼ教官がいるということはやっぱり・・・」

「そうなんだ

リュウ隊長は怪我でG U Y Sの隊長を辞めることになってしまったんだけど

代わりに隊長として付くことになったクゼ テツペイです

皆は僕のことを研修や講習の時に知っているので早く馴染めると  
思うし

代理という形ではあるけれど僕は隊長として皆に指示していきたく  
いから

よろしく」

「まあ変な奴が隊長になるよりテツペイさんが隊長になってほっと  
したぜ」



「あたしはあんたが隊長にならなくてほっとしたわ」

「な、なんだと！」

「こらこら、シノザキ隊員もタマガワ隊員も喧嘩しない」

この男勝りなのが特徴なのが シノザキ マオ隊員

女性では有るが戦闘機の操縦はタマガワ隊員に引けをとらない優秀な人

容姿も美しく整備部の憧れの的

「チッ」

シノザキ隊員に食って掛かったのが タマガワ カオル隊員

抜群の反射神経と射撃能力、操縦能力

リュウさんを除けばG U Y Sに適うものはいないエース隊員だ

ちょっと短気なのがたまに傷

「でもアイハラ隊長に命の危険が無くてよかったあ」

このぼわぼわしたく口調なのが ハセガワ ハルカ隊員

シノザキ隊員やタマガワ隊員のように戦闘機に乗ることはめったに無い

主にオペレーターとしてチームをサポートしてくれる存在

性格はちゃんと芯が通ったしっかりした性格

シノザキ隊員がアイドルならハセガワ隊員はマスコットキャラクタークターである

「あ、そういえば隊長、この基地に入り込んだあの宇宙人

どうなっただんですか？」

「は、入り込んだ宇宙人って」

タマガワ隊員は理由は知らないが宇宙人が嫌いみたいだ

「ああ怪獣を倒した後直接此処に来たみたいよね」

「彼は今、国家安全保障委員会の監視下にいるよ

彼のくれた情報は有益だったけどまだ信用されて無いみたい」

「情報ってあの四次元怪獣のことですかあ？」

「そつだ」

「隊長はあの宇宙人のいつた事を信じてるんですか？」

「彼が教えてくれたことは今回の事件の真相と見て間違いない

すべての辻褄が合うんだ」

「じゃあ次々と怪獣が現れ始めるって事？」

「そうなる、だからこそ彼に協力を早くに求めたいと思ってるけど

世の中、そううまくいかないからね」

「そんなに簡単にしんじて」  
「ビー！！ビー！！」

「東京郊外に突如巨大な生命反応を確認しました！」

「いきなりか！」

「GUYSSペーシーからの衛星画像が送られてきます！」

「いつは…！」

「今すぐ出撃します！」

「まって」

「どっして…！」

「今あいつを攻撃しに行っても意味が無いからだよ」

「意味が無いってどうゆうことよ？」

「ドキュメントに記録があります」

そうあいつには生半可な攻撃は通用しない

「こいつの名前は磁力怪獣アントラー」

かつてウルトラマンの光線をも跳ね返した強力な怪獣だ」

## ウルトラぶっ飛び大作戦（前書き）

アントラーをどうやって倒すか考えてたら遅くなりました

すみません

## ウルトラぶっ飛び大作戦

「アントラー？」

「そう、アントラー

昔、バラージという町があってそこで町を襲ってたのがアントラーなんだ

戦闘記録ではウルトラマンの光線を跳ね返す強固な鎧の様な体の特徴の怪獣だから

ガンウィング・ヤガンローダーでの火力じゃ倒すことは出来ない」

なんせ光線が効かない位の体なのだから

「ならこのフェニックスネストやガンフェニックスのメテールを使えば！」

そう火力的には十分だが

「確かに、このフェニックスネストやガンフェニックスに搭載されているメテールを使用すれば

アントラーを倒しうるかもしれない」

「なら！」

「だけど、メテオールは切り札だ

まだこれ以上の怪獣が出現する可能性のある今の状況で

フェニックスネストやガンフェニックスのメテオールを使うことは出来ない」

「しかし！メテオール使わなければ倒すことなんて出来ないでしょう！」

「いや、例え今がメテオールの使い時だとしてもアントラー相手じゃ使えない

アントラーは磁力光線を放って飛行機を引き寄せ中の人間を食べる怪獣だからね」

フェニックスネストのメテオールはイオンビームだ、妨害を受ける確率も高い

「ならどうやって倒すって言うんですか！？」

興奮するタマガワ隊員を宥める

「少しは落ち着いて冷静になるんだ

作戦は思いついてる」

とても簡単な作戦をね

「でもこんな怪獣本当にどうやって倒すんですかあ？」

「無理に倒す必要は無いんだ

アントラーを宇宙へ吹っ飛ばす、

重力偏向板を使ってね

そうすればアントラーは帰ってこれないし

例えば地球に来れたとしても大気圏に入った瞬間に空気摩擦で焼かれるし

それで生き残っても大体の確立で太平洋のど真ん中にポチャン、  
というわけさ



もともとアントラーは砂漠地帯を住処にしている怪獣だからね」

「それならアントラーを倒すことが出来るわね」

「ああすぐにGUYSスピーシーに連絡して作戦を開始する」

「「G I G」」

本当にやる事が無かったしネットにもつながることが出来なかった  
ので

仕方なく筋トレをしていた俺は、怪獣が出現したことを気配で察知  
した

・・・なんか懐かしい気配だなあ

戦ったことは無いがこう、記憶の奥底にある気配を感じる

昭和シリーズで登場した怪獣かな？

俺はいつになっ たらここから出られるのだろうか？

早くしないと町に被害が出ると思うんだが

無理やり出ようと思えば出られるけれど

問題になりそうだから勝手な行動は出来ない

此処は人間側の判断に任せるしかない

バラバラ！

よし！準備は整った！

「タマガワ、シノザキ両隊員は所定位置で待機していてくれ

作戦を開始する！」

すでに都心の近くまで来ているアントラー

其処に重力偏向板の狙いが定まる

「メテオール解禁！」

タマガワ隊員のトライガーショットからキャプチャーキューブが放たれ

一時的にアントラーの動きを止める

「いまだ！」

改良されたキャプチャーキューブでも動きを封じれるのは少しの間だけだろうけど

今はそれで十分

重力偏向板が作動しアントラーが一気に空高く飛び上がっていく

キャプチャーキューブに捕らえられたアントラーは身動きがとれず  
そのまま

上へ上へと上がっていく

!?

何が起きたんだ!

そのまま空へ飛び立っていくはずのアントラーが偏向板の作用領域  
内から

いきなり外れ

落ちてくる!!

「新たに巨大な生物反応確認! 特定怪獣と一致!

ボガールが出現しましたあ!」

くそ! ボガールが来るなんて

やっぱり彼の言っていた通りにボガールも呼ばれていたんだ

アントラーを食べに来たに違いない！

「隊長！どうしますか！」

「タマガワ隊員とシノザキ隊員はガンフェニックスストライカーで攻撃を開始」

「どちらを優先的に攻撃しますか！？」

どちらも今この時点で倒しておきたい

だが倒せるとしても一体だけ、

だけど！

「隊長！国家安全保障委員会から連絡です！」

戦っていたアントラーとボガールを赤い球体が吹き飛ばした

「協力を承諾したそうです」

へア！！

やっと外に出れたよ

それにしてもアントラーか・・・

懐かしい怪獣をブルトンも呼んだもんだ

だが今は先に厄介なボガールを倒す！

くそつアントラーが邪魔！

なんか微妙にコンビネーションアタックしてくるからウザイ

なんで2対1になっているんだよ！

いつの時代も変わらずアントラーは硬いしな

アイスラッガーでボガールの尻尾を切り落とす

そして至近距離からのウルトラサンダー！！

エネルギーを電気に変えて放つだけの単純な攻撃だけど電撃が苦手なボガールには効くだろ

ボガールが悲鳴を上げる

これで厄介なボガールをたおす

ぐっはッ

いきなり足を引き込まれて顎打ってしまった

あっ逃げんな！ボガール！！

くそつまんまとテレポートで逃げられた

俺は後ろに振り返り、したり顔をして俺の足を挟んでいるアントラ  
ーの眼の玉に目掛けて

手裏剣光線を執拗に当てる

そして顎を開いた隙に大顎の関節の部分目掛けてアイスラッガーを振り下ろす

そおい！

顎の一本を切り裂かれたアントラーはたまらず地中から出てきた

ようこそ地上へ

そしてさようなら！！

アントラーのどてっばらにスパイラルシュートを叩き込む

硬い装甲をまるでドリルのように削りながら放たれたそれは

装甲を破りアントラーを爆散させた



バラバラ！（後書き）

クロス君は知識を持っているだけに  
怪獣の弱点を徹底的に突きます

## 1つ対面

と、言うわけで

国からの協力要請を受けたクロスです

ブルトンの存在をまだ確認することは出来ていないみたいだけど

ボガールが再度地球に現れたことが

決断のきっかけになったらしい

ボガールはかなり悪質な怪獣というのをやっぱり熟知していたみたい

そして肝心のボガールを逃してしまう俺

・・・やっぱ、あいつは厄介だ

あいつの目的はあくまで捕食

それが無理だと悟ればすぐに逃げてしまう

戦闘力も高く、そして狡賢い

逃げないように前回と同じようにボガールモンスにしてから

倒すという手もあるには有るけど・・・

気分を切り替えよう

どうやら俺もGUY Sのメンバーとして迎えられることになった

人間の姿になることもOKということだ

俺は今のGUY Sメンバーと顔合わせをすることになった

「それじゃ紹介するよ

M78星雲から来たウルトラマンのクロス君だ

」

クゼ隊長から紹介を受ける

「えーと、今紹介を受けたクロスです

今回から地球に出現し始めた怪獣を倒すべく来ました

仲良くしたいので皆さん

よろしくー!」

「「・・・」」

・・・すべったのか？通りすがりのウルトラマンが良かったかな？

「えーと、G U Y Sは彼のサポートをしていくと行くという事になっています

じゃあ皆も自己紹介を」

「私の名前はシノザキ マオ あなたの事をガンローダーで援護することになるわ

よろしくね！クロス君」

おお、なんともクールビューティーが似合いそうな女性だ

「えーとね、私の名前はハセガワ ハルカです

此処でみんなのことをサポートするのが私の仕事です

えーと、よろしくね」

か、かわいい！

なんか庇護欲を掻き立てられる人だなあ

眼鏡にニーソックスって

反則だろおお

「俺の名前はタマガワ カオル

よろしくはしなくていい、以上だ」

……喧嘩売ってんのか？

「それじゃ改めて僕も

僕の名前はクゼ テツペイ

G U Y S の隊長をやっています、今後もよろしく

クゼ隊長と握手をする

「ねえ気になってたんだけど」

「？」

シノザキ隊員なんですか？

「あなた、今の姿は仮の姿なのよねえ？」

「そうですね？」

「もっとイケメンにしたほうが良かったんじゃないの？」

.....

俺はその日涙で枕を濡らした

なん・・・だと・・・？

自己紹介を済ませた後

俺はシノザキさんから基地の案内を受けていた

「此処が食堂になるわ」

ここはメビウスするときにも見たことあるぞ

「いろんなものが食べることが出来るから

気軽に利用してね」

へえー

「大体案内したわね

後はそうねえ、町でも案内してあげましょうか？」

まじっすか!？

ッ!!

なんだ!今の寒気は

まるで今ここにいる人たち全員から殺気を受けたみたいだ

周りを見渡してみると

うどんやカレーを食べながらこちらを睨み付けて来る男性職員  
の姿が！

それも多数！

「い、いやあ其処までして貰うと申し訳ないですよ」

「何言ってるのよ、遠慮しないほら行くわよ」

「え、ちょ」

腕を引つ張られ食堂を後にするが

其処での嫉妬の殺気は忘れられなかった

「忘れてたけどあなた宇宙人なのよね」

「はあ、まあそうですね」

「じゃあ色々地球のこと教えなくちゃね

此処にもいっぱいおいしいものがあるのよ」



また食べ物ですか

「あれ、」

「え？」

「ほらあの娘、一人でいるわ

迷子かしら？」

「そつみせ!？」

「どうかしたの？」

「いや、なんでもないです」

「そつ、」

ねえお嬢ちゃん、こんな所でどうしたの？

お母さんは？」

「……はぐれちゃったの」

「そつ、じゃあお姉ちゃん達と一緒に探そうか？」

「…」

シノザキさんとこの娘の親を探す

「なかなか、見つからないわね、クロス君ちょっと其処の交番に行つて来るから」

此処でアイスでも買ってあげていて」

「わかりました」

俺は売店でアイスを買って女の子に渡しながら言った

「一体どういう心算だ、ボガール」

「やはり気付いていた様ね、ふふふ」

こいつは可愛い女の子なんかじゃない

「なにが、はぐれちゃったのおだ、不気味すぎるぞ」

「あら心外だわ、こんなに可愛い女の子に不気味だなんて

私はあなたにご挨拶がしたかっただけよ、ウルトラの戦士様」

長い舌でアイスをぺろりと舐めながら言った

「それと私を種族名で呼ぶのやめてくださらない？」

私にはキシルという名前がちゃんとあるの」

「それで、キシルちゃんは俺に何の用だい？」

またビリビリしびれさせて欲しいのか？」

アイスを凄まじいスピードで食べ終えたボガール、キシルは

「あら、言ったじゃないご挨拶だって

私たちこれから長い付き合いになるんだもの」

長い付き合いだったって？

「冗談じゃない、お前との付き合いはこれで終わりだ」

「あら、此処でおっぱじめるつもり？」

いいけど、私が死ぬまでにはここにいる人間はほとんど息絶える  
と思うわよっ。」

にっこりと笑う

「それじゃ、またお会いしましょう」

「じぎげんよう」

そういつてあいつは消えていった

「あら、あの娘はどうしたの？」

シノザキさんが帰ってきた

「あの娘の母親が現れて一緒に帰って行ったよ」

「そっ、それはよかったわ」

## スーパーマーケット

俺はGUY'Sのメンバーになって

聞きたかったことを

クゼ隊長に打ち明けてみた

「メビウス先輩の戦闘記録を見ていて

このマケット怪獣っているじゃないですか」

怪獣の話題を振られてうれしそうなクゼ隊長

「ミクラスとウィングダムってウルトラセブンのカプセル怪獣だった怪獣ですよね？」

「そうだよ、ドキュメントに記録されていたデータを元に復元したのが

マケット怪獣だからね、元々カプセル怪獣だったこの二体が危険も少ないだろうって

選ばれたんだ」

そこに疑問をぶつける

「なんでアギラがないんですか？」

アギラだって立派に戦ったカプセル怪獣なのに・・・」

それを聞いたクゼ隊長はすごく真剣な顔になった

「其処に気が付いてくるとは、流石だねクロス君」

何が流石なのだろうか

「実はマケット怪獣としてアギラも

案としては出ていたんだ」

「へえー、ではなぜ没に？」

「まず記録が少なかったこともある」

「え？でもそんなに差、無いと思いますけど」

「え？そうなの？」

「え？」

「え？」

「なにそれ怖い」

そんな・・・

まさかアギラは影が薄いからマケット怪獣に成れなかったのか？



## スーパーマーケット（後書き）

めっちゃ短いすよね

すみません

そしてクゼ隊長は本当はミクラス達がカプセル怪獣だと知らなかったことが判明！！

・・・申し訳ありません

削除もありうると思います

書きたかったんです・・・

## 結構大変

ポガール少女キシルとの出会い

それから時は流れ一ヶ月ちよつとが経とうとしていた

この一ヶ月間はとても濃い一ヶ月間だった

あの後、早速登場したのはベムスターだった

人工衛星の攻撃を潜り抜けやってきたベムスターだったが

まあ対処法がタイラントと同じなので

対処は簡単だった

そして二回目のタイラント襲来

特に変わったことも無く撃破

次に現れたのはアボラスとバナラだったのだが

撃破する前に二体ともキシルに捕食され終了

そして三回目のタイラント襲来

またもや登場したタイラントに驚きを隠せないまま

戦うが前と変わらず撃破

そのあとツインテール大量発生事件が起こり

それに伴いグドンも大量発生

無数の怪獣とそれを捕食しまくるキシル

片っ端から撃破し続ける俺

グドンとツインテールはあわせて二十体近くにも及んだ

そして地球怪獣、最強の声も名高いバードンが登場

苦戦しつつ倒せたと思いきや横からキシルに搔っ攫われた

俺涙目

そしてテレスドン登場

それと四体目のタイラントも出現したのだが

俺がテレスドンを倒している間にタイラントはキシルに捕食されていた

そして今、対面しているのが

五体目のタイラントである

.....

ブルトンはタイラントが好きなのかねえ？

うんざり半分あきれ半分でタイラントと戦う

もはや慣れたものだ

ウルトラサンダーを手に纏わせたサンダーチョップ（NARUTO  
の千鳥がモデル

でバラバの両腕を切り裂く

アロー光線と火炎放射を潜り抜けアイスラッガーで首を飛ばす

死体はボガールに食べられました

まあそのまま帰す訳も無く

キシルと再戦

キシルは俺が弱点を熟知していることを学んだのか

ほとんど接近戦をしなくなっていた

エネルギー弾を空中に無数に漂わせこちらに狙いを定め

一気に放ってくる

俺は手に纏っている雷を鞭のように伸ばし薙ぎ払い打ち落とす

俺が接近戦をしようとする腕からエネルギーの刃を生やし振り回してくる

掻い潜ると尻尾による狙い撃ちが来る

そのため俺はうまく手を出せないで居た

こいつ、強くなってるなあ

前からこいつは面倒くさかったがもっと面倒くさくなった

邪魔な尻尾を封じるため

小型ウルトラキャッチリングを撃ちまくる

大体は打ち落とされたが

運良く足に当たり

それにつんのめっている隙に

一気に距離を詰める！

食らえ！

結果から言つと

また逃げられた、トカゲの尻尾きりのように切り落とした

尻尾を置き土産にして

## 成長

俺は食堂でハセガワ隊員とランチを食べ終わり

午後の時間をゆったりと過ごしていた

「クロス君は最近とっても忙しいね

私達がサポートに回っているとはいえ

それでもすごい数をこなしてるよねえ」

いやぁそれほどでも

「良いんですよ、俺は

地球を守れていれば、それで」

紅茶を飲む

「そ〜お？

・・・



ねえ？今度お休みが取れたらさあ

私と一緒にどこか出かけようよ！」

！？

紅茶噴出しちゃった

「え！？」

まさかそれって？」

「もう」

私に言わせないでよお！

そ、それじゃ

私は行くから！」

ハセガワ隊員は足早に去っていった

.....

はて？いつの間にフラグを立てたんだっけ？

「なにニヤニヤしてるのよ？」

不気味よ？あなた」

・・・

なんで

「なんでここにいる、ポガール幼女」

「失礼ね、レディに向かって幼女だなんて

そんなんじゃないわよ

それとキシルって呼んでって言うてるじゃない」

「うっせ

お前なんて幼女で十分だ

それとポガールに恋愛のことだとやかく言われたくないわー！」

「本当に失礼ね

私達だってちゃんと恋をするわ」

「・・・交尾の後

旦那の事、食べたりしないだろうな？」

「あら、知ってたの？」

こいつらカマキリか

「とにかくお前、何のようだ？」

さもここにいて当然かのごとくここにいるキシル

だが此処は町の食堂ではない

G U Y Sの本拠地、フェニックスネストの食堂なのだ

「何の用って

食堂に用なんか1つしかないでしょ？」

此処のうどん、おいしいのよねえ」

こいつ……

「そういえば

あなた最近、電撃技のレパトリー増えすぎじゃないかしら？

時々死にそうになるのだけれど」

「そりゃ、殺すつもりでやってるし」

「それでもよ

なにあれ？あなたが放ってきた電撃の矢、弓だから矢が一本飛んでくると思ったら

数十本飛んで来るとか意味わからないわ」

サンダーアローレイシュトROOMのことが

「グドンを盾にして余裕で対処してたくせに

お前のために電撃技を磨いてるのに

「肝心のお前を倒せない

というか、いつお前ボガールモンズになるんだよ」

いまのこいつよりよっぽど対処がしやすい

「あなた結構私達の事知ってるのね

でも残念、私は変異体になる事はないわ」

「チッ」

「あからさまな舌打ち、ありがとう

（というかあなたに変異体になっても適わない事は眼に見えてい  
るもの

本当、ウルトラの戦士って反則よね

私がこんなにも食べてエネルギーを得て

タイラントを食べることが出来るくらい強くなっているにも拘わ  
らず

私の方がまだ押されているのは納得できないわ」

「あ、そうそう」

「？」

「私ちよつと姿を隠すわね」

なんか宇宙から厄介な奴が来たような気配なのよ」

こいつ（ボガール）に厄介って言わせる奴が来るのかよ・・・

G U Y S ス ペ ー シ ー

「！？」

緊急事態です！

宇宙生物攻撃用人工衛星の大半が撃墜されました！」

「なんだと!」

「衛星からの最後の映像が届きます!」

「黒い・・・宇宙船・・・」

人工衛星が最後に映していたのは

鈍く黒く光るカラーリングの三機の宇宙船だった

## 愛と勇気のドッキング

「ブー……ブー……」

「!?」

基地内に警告音が鳴り響く

「どつやらもう来たようね」

お早い到着だわ、張り切っちゃってまあ

ふふふ、じゃあがんばってね」

俺はキシルを睨み付け

駆け足で司令室に走った

「GUYSスピーシーから緊急連絡……」

人工衛星の大半を撃墜した未確認飛行物体が

フェニックスネストに接近中です……」



司令室に入ったと同時に

モニターに襲来者の映像が映し出される

そしてクゼ隊長と俺は同時に叫ぶ

「「こいつは!」」

そう、クゼ隊長もすぐにわかるあの飛行体・・・

いやロボットの事を

セブンの攻撃をびくともせずセブンでは倒せなかった

ロボット怪獣最強の一角

それが空中でドッキングし地球に降り立つ

「キングジョー・・・ッ!」

「クロス君!」

クゼ隊長が俺に呼びかける

「君なら知ってると思うけど

相手はキングジョーだ、しかも記録に残っていた金色では無く黒色

そして腕についでるあの武器

どう見ても改良型だろう、君には時間稼ぎをしてもらおう」

クゼ隊長の狙いはおそらくセブンの時と同じようにライトンR30  
爆弾をつかった攻撃を

考えているのだろう

クゼ隊長は怪獣の特徴などを細かく知っていたり分析したりするの  
が得意なので

今までも的確な指示をさせた

今回の敵もドキュメントに乗っているいるので

それを根拠に作戦を立てたのだろう

だがそれは大きな間違いだということが俺にはわかる

あのキングジョー・・・

いやキングジョーブラックはもはやキングジョーとは別物と  
いっていい

こいつが始めて出てきたのは

設定が今から凄まじく未来の話であり

そしてこのキングジョーブラックはさらに未来の技術で作られている

その強さは圧倒的

なにせレイブラット星人を憎んだ

未来のペダン星人がレイオニクスを殺すためだけに作ったのだから

は？

自分で今言っていることの意味に気が付いた

なんで此処にキングジョーブラックがいるんだ？

ブルトンの力で呼ばれたとしてもあれは怪獣ではなくロボット

命令無しに動いたりはしないだろう

しかもレイオニクス抹殺専用なんだ

宇宙人の寿命はその宇宙人によってさまざまだから

レイブラットの遺伝子を受け継いだ

レイオニクスを殺すため今の時点でペダンが未来から来ていてもおかしくは無いが

地球のレイオニクスのレイが生まれるのはもっと未来で

しかも惑星ボリスでレイは生まれるのだからこいつが地球にいる意味がわからない

が、いまはこいつを倒すことに集中しなければ

「やってくれるね？クロス君」

「クゼ隊長時間稼ぎはもちろんするつもりだが」

「？」

「別に倒してしまってもかまわないでしょう？」

これが俺の全力だあああああ

悠然とこちらに歩いてくるキングジョーブラック

それに横から挨拶代わりに

レオキックをぶちかます

ってぜんぜん効いてねえ！

重心ぐらい動けよ

明らかに俺のことをインプットされ強化されてやがる

こちらに体の向きを変え

そしてペダニウムランチャーをこちらに向けてくる

このペダニウムランチャーの攻撃を受けるわけには行かない

十発程度で怪獣を即死させる威力を持ち

リロード無しの連射性能

わけがわからないよ

反則じゃない？その武器

当たりたくは無いので接近し格闘戦に持ち込む

が、駄目……ッ！！

なにこれ硬い、まだタイラントのほうが柔らかい

隙が出来てしまった俺はペダニウムランチャーでリアアットされ吹っ飛ばされる

ぐええ

首が……

そして銃身をこちらに向ける

ちよ！

咄嗟にバリアーを張るが数発防いだ後破られ体に銃弾が当たる

ぐっは、やばい、威力が半端ない

横に転がり何とか射線上から離れる

だがまだ諦めない！

跳躍しレオキックの体制に入る

そして！火起しの様に体を回転させる！！

メビウス先輩のパクリだがこれなら！

駄目でした

重心を動かすくらいは出来たけどあまり効いてはいないみたい

どうやら耐電仕様のようで電撃はあまり効果を出さず

スパイラルシュートも受けきられる始末



どうやら秘密兵器の用意が出来たみたい

なるべく当たりやすいように

ウルトラキャッチリングで動きを短い間だけだが止める

そしてガンフェニックスストライカーから

ライトンR30爆弾と見られるミサイルが撃たれる

見事大当たり！！

すげえ！！キングジョーを吹き飛ばしたぞ！

空気読めよおおおキングジョーブラック！！

立ち上がるとかおかしいだろ！！

打ち落とそうとするキングジョーを体を張って妨害する

・・・あれを使うしかないようだな

距離をとった俺にキングジョーブラックは容赦なく射撃してくる

それを俺は特製のバリアーで防ぐ

まだ・・・まだだ・・・ッ！

そのまま押し切ろうと分離し

ランチャーにエネルギーを貯めて

特大のエネルギー光球を放ってくるがそれも防ぐ！

き、き、キターーーーーー

ウイイイイイイイイイイ！！

スーパーハイテンションになった俺の体には金色のラインが刻まれ

体からは雷が迸る

残念だったなキングジョーブラック！！

てめえの攻撃はすべて俺の力へと変換されたのだ！！

ハッハッハッハッハ

こちらに銃身を向けて攻撃してくるが

その行為は蜂蜜のように甘い！！

体中からあふれ出す雷を腕に集め伸ばし

鞭のように振るわれたそれで

銃身をぶった切る

不利になったと判断したのか即座に分離して逃げようとしていたが

残念、俺からは逃げられない

すでにキャッチリングは発射済み分離なんぞ許さない！

そして

身動きが取れないキングジョーに向かってアイスラッグを浮遊させる

これがウルトラノック打法のバリエーション！！

膨大な電力に物を言わせる

これが俺の全力だああああああああああ！！

俺の殴り飛ばしたアイスラッガーはローレンツ力による

鬼の加速によって

キングジョーブラックを木っ端微塵のバラバラにした

これが俺の全力だあああああ(後書き)

必殺！

ウルトラレールガン！！

一件落着だが・・・

苦戦しつつもキングジョーブラックを倒した俺だったが

倒す際にエースさんから禁じられていた

ドレインシャッターをつかっちゃった

まあ仕方ないといえば仕方ないのだが

しかしそれよりも

俺を戦いの勝利の喜びに浸らせない原因が

キングジョーブラックそのものの存在理由である

予測して考えられることは

1、未来のペダン星人が地球をこれを機に侵略し始めた

考えられなくも無い理由だ

今地球はブルトンとボガール幼女のお陰で混乱している

この隙を突いて侵略してくるということなんだが

ウルトラギャラクシーであそこまでレイオニクスを憎んでいた

未来のペダン星人が

しかも俺という宇宙警備隊が現在地球に存在しているにもかかわらず

地球へと侵略してくる可能性は低いと感じざるおえない

なら

考えられる理由はひとつしかない

2、地球にいるレイオニクスを抹殺しに来た

これだ、これがキングジョーブラックを送ってきたペダンの狙い

キングジョーブラックが例えブルトンの力で此処に転送されたのだとしても

この理由なら辻褃が合う

問題はそのレイオニクスが誰なのか？

ということだ

俺が現在地球で確認している種族は3種類

まず

俺というM78星雲人だ、だとするとキングジョーは俺を狙ってきた事になる

耐電仕様になっていた理由も説明が付く

だが、この予想はありえない

なぜならM78星雲人のレイオニクスはすでに決まっているのだから  
それもレイブラッド星人が直々に受け継がせた最凶最悪のウルトラ  
マン

そう、ベリアルだ

現在ベリアルは豚箱の中に監禁中

地球にいることはありえない

そして次は地球人

これも地球のレイオニクス、レイの存在があるので



可能性は無いといっても過言じゃない、

ただ可能性が無いわけでもない

地球のレイオニクスは二人いるからだ

といってもいくらレイオニクスだといえど地球人だ

(精神体になってレイを助けるといった人間離れしたこともしていたが)

この時代にあのふつくしいおねえさまが居る事は考えられない

じゃああとは？

そう、ボガール幼女ことキシルだ

.....ありえなくは無いが

種族的にありえない

っていうか一番レイオニクスにしちゃいけない種族だと思う

ボガールは

レイオニクスが一番の能力である怪獣を使役する能力を

怪獣を捕食する存在に受け継がせたら元も子もないと思う

だが考えられるのはそれくらいしか……

「あなたがなに考えてるか

私、分かつちゃったわ

言っておくけど宇宙中に自分の種を撒き散らす変態宇宙人の血なんて受け継いでないわよ

私は

っっていうか私はむしろ使役される側だもん」

……え？

食うか食われるか

ボガールの出現に気づいたのはこいつに声をかけられたときだった

明らかに不注意だった

慌てて回避行動に出たものの

一歩遅く、俺の肩からは出血していた

「ふふふ、初めてあなたのことを食べたけれども

案外おいしいのね

怪獣ほど旨み成分が無いけれど

深みがあってこれはこれでいいわね」

「いきなり不意打ちとはね」

「あら、ちゃんと声をかけてあげたじゃない？

私なりの感謝の印よ

「ありがたく思いなさい」

「感謝の印？」

「そうよ、あの忌々しい屑鉄を木っ端微塵にしてくれたもの

あれがいたら私はゆっくりとお食事もお出来ないし

片っ端からご馳走を殺していくし

とっても迷惑だったのよ」

「おまえ、キングジョーブラックのこともレイブラッド星人の事も知っていたのか」

「あら、当たり前じゃない

糞親父の仕えていた人の対抗馬だったのだもの」

邪将アークボガールとエンペラ星人の事だろうか

「お前、レイオニクスに使役されてるのか？」

「そんなわけ無いじゃない、

私は縛られることが大嫌いな

あんな変態宇宙人の血を引いてる奴等なんか

私がこき使われていると思う?。」

そんなわけないな

「さて、お話も済んだことだし?

あなたは手負い

ふふふ、今日はお腹一杯になれそうね」

「簡単に食えると思うなよ」

「当然、あなたが理不尽なくらい強いのは知ってるわ

その上での自信なのよ」

幼女の皮をかぶった餓鬼が舌なめずりしながらこちらに向かってくる

が、こいつは気づいていない

その後ろからタマガワ隊員が狙いをさだめていることに

タマガワ隊員の容赦ない攻撃で隙が出来た事を機に

本気の後ろ回し蹴りをする

「まだ食われてねえみてえだな」

「お陰様でね」

「てめえは帰れ」

後は俺がやる」

「いや、その必要は無い

あいつはもう逃げた」

「!?.....ツチ」

**食うか食われるか（後書き）**

これを書き始めて一ヶ月ちょっと

そろそろ

毎日更新しなくていいよね？

もうゴールしていいよね？

だめ？



番外編 ひとつぼい(前書き)

テストなんて無かった!!

## 番外編 ひとつばい

ある昼下がりに

食堂にて

隊員達的一幕である

「ねえ、思ったんだけのどさ

クロス君は本当は人間なんじゃないかな？」

シノザキ隊員はラーメンをすすりながら言った

「はあ？なにいつてんの？」

シノザキ隊員の言ってることが理解できないタマガワ隊員は日替わり定食のコロッケを摘んでいた

「いくらなんでもそれは無いよ」

カレーを食べつつクゼ隊長は言った

「そうですね」

ハセガワ隊員もパスタを丸めながら同意する

「あのね

前にこんなことがあったのよ

それはね私が休憩時間にゲームをやっていたときの話よ」「

そこでタマガワ隊員が突っ込む

「おい！てめえこんなときに何暢気にゲームなんかやってんだよ！」  
「いいじゃない？」

休憩時間に何をやろうと私の勝手でしょ！

話の腰を折らないでよ

それでね私の事を見つけたのかクロス君が私のゲーム機を覗いてきたのよ

それでなんていったと思う？」

「これなんですか？とか？」

「驚くことに、雨パにはキングドラを入れたほうがいいですよ、っていったのよ!！」

「「?」「」」

「は?」

「俺にはてめえの言ってることがさっぱりわからん」

「あめばとかきんぐどらってなんですかあ?」

「あら、わからないの?」

雨パって言うのはあめふらしパーティーの略で

そしてキングドラって言うのはポケモンの名前よ」

「てめえそんな歳にもなってポケモンやってんのかよ」

その言葉にシノザキ隊員が切れる

「ポケモンを馬鹿にしないでよ!！」

私の人生のバイブルなんだから!

ああ愛しのレッドさまあゝ」

「……彼女が男性に興味を示さない理由はこれか」

クゼ隊長は呆れながら言った

「でもなんでクロス君は地球のゲームを知っていたんでしょ？」

ハセガワ隊員は不思議そうに言った

「彼の事だし地球の文化を知る過程で知ったんでしょ？」

ポケモンは世界的にも有名ですしね」

そこにシノザキ隊員は待ったをかける

「あのね彼が言ったことはポケモンを知ってるとかそういう次元じゃないの

まず天候を使った戦術の一つである雨パのことを知っていたし雨の恩栄をとて受けられる

すすい特s「はいはいわかったわかった

おまえのポケモン話なんか聞きたくないから

意味不明だからお・わ・り

まったく無駄な時間を過ごしちゃったぜ」

タマガワ隊員はそういった

番外編 ひとつぼい（後書き）

何かいてるのか

深夜だからテンションあがっていてわかんないぜ！！

## 最悪の敵

つかの間の平和な時

しかしその裏で

人間の時からこの俺の人生の中で

おそらく最悪の敵が静かに忍び寄っていた

キシルにつけられた傷跡もすでに治ったある日

あいつは突然

この星にやってきた

ビー！ビー！

「緊急事態です！」

都市部に突然強大な生命体が出現！



さらに空に巨大なスクリーンのようなものが！」

画面の空に黒い幕のようなものが張って行っている

そしてあいつは現れた

「……………え」と、

あゝあゝ聞こえてる？これちゃんと繋がってる？ あゝそう

じゃ、改めましてこんにちは〜！！じゃじゃじゃじゃ〜ん

始めましての方は始めましてそして僕のことを心に刻み込んでね

そしてはじめましてじゃない方はおひさしぶり〜

皆大好きヤプールです！！



あれが僕大嫌いなんだよね

だからさ、もう僕のやられ役になっちゃいなY O W W W

じゃまあそつゆつこととで虐殺かいし〜」

させるか!!

見たことが無い怪獣・・・こいつが本当にヤプールのとしたら超獣  
にレオキックをぶちかます

「あ〜!!」

現れたなウルトラマン!!僕の傑作超獣蹴飛ばしやがって

本当にムカつくよね君達

マジウザイし

と、言うわけで、や〜ておしまい!!」

ヤプールの言葉と同時に超獣が俺のほうに向かってくる

外見を見るに体には武器になりそうなものは付いていないようだ  
ただ単純に突っ込んできたので

それを難なくアイスラッガーで応戦、真っ二つにする

「あゝあ

やられちゃったか、まあいつか代わりなんか幾らでも居るしゝ

材料も大量なんだよねゝ

つと此処で地球人の皆さんにスペシャルクイズゝ！！

僕ヤプールは今の超獣を作る際

あるものを材料にしましたゝ

それは一体なんでしょうかあ？」

ッ！

俺の心の中にとてつもない嫌な予感と





## 最善の方法（前書き）

感想でいただいたいくつかの問題点を吟味し

いくつか変更した点があります

## 最善の方法

「うわっ

何その顔、ちょくうけるんですけどwww

まじで君のその顔見ただけでこの超獣作って正解だった

人間なんてはいて捨てるほど居るんだから材料には困らなくて

とつても経済的、そしてウルトラマンに精神的ダメージも負わせる  
とかwww

なんてコスパwwwやっぱ僕って天才？

それじゃあ張り切って追加でDON!!」

空が割れ其処から超獣が落とされてくる

俺はそれをただ見ていた

ウルトラマンとして地球で怪獣と戦う

その戦いの中で被害を絶対に出さないようにすることは不可能だった

だからこの任務に就くときに覚悟しなければならなかった

人を殺してしまうことがあると



それはわかっていた事だった

それでも今自分の手で意図して人間・・・を殺してしまったことに

俺は少なからずショックを受けていた

そのことは自分の中でも割り切れなかった

地に足を着け俺のほうを見た人間だった超獣は

俺に向けて苦しそうな目を向けてくる

「一匹じゃ話になんなかったので三体投入」

じゃあ戦おうかウルトラマン君

ぎゃははははははhhhhhh

今はそんなことで呆然と立ち尽くしている場合じゃない

俺は拳を握り締め怒りに震える

地球人の前で俺に地球人だった超獣を殺させる

それがこいつの目的

割り切れないその心を隠すかのように怒りの感情がふつつと湧いて来る

その怒りは俺の頭を違った意味でクリアにしてくれた

俺は今、俺の出来ることをなす!!

体に溢れんばかりの光を溜め込む

「お!お!必殺光線の予感!!

人間超獣みんなふっ飛ばしちゃうのか?

ワクワクドキドキWWW」

三人に向かって貯めた光を当てる

「どっか~~~~~んあれ??」

超獣は爆発せず

「は？何これ意味わかんない」

超獣は元の姿・・・つまり人間の姿へと戻っていた

セルチエンジンビームは成功したようだ

「は？は？」

いみわかんね

まじで、元にもどった？

はああああああ？マジ意味わかめなんですけど

空気嫁よ！！

今の流れだったらきたねえ花火を打ち明けるところだろ？

うわぁマジテンションダダサガリング

これだからウルトラ戦士は反則なんだよ

うわ〜マジこのために用意した人間無駄ジャン

はぁ・・・

まあいいや、過ぎたことは気にしないのがヤプールだしね

ここはひとまず引き返すから

またこの無駄になった人200人ぐらいの利用方法考え付いたら地球にまた来ますわ

それじゃ

またね!!!」

## 怒り

「この糞野郎がつー!!」

タマガワ隊員は怒りを隠せないようだ

机を腕で強く叩き顔を赤くしている

あのヤプールが去った後

クロス君はエネルギーを使い切ったせいなのか

いきなり倒れ未だ目が覚めない状態である

「人間を舐めやがつてー!!」

いつもなら物に当たっているタマガワ隊員に注意をするシノザキ隊員も顔をうつむかせている

おそらく彼の怒りはヤプールだけの物ではないのだろう

見ているだけで何も出来なかった自分にもその怒りの矛先は向いている

「落ち着くんだ、タマガワ隊員

今君が怒鳴り散らしても何も変わらないよ」

そういつて宥める

「ツ・・・糞！」

「今僕達がしなければならぬことは

再度のヤプールの再来に備えることだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・隊長、超獣だった方たちはどうなったんですか？」

ハセガワ隊員が言った

「ああGUYSが保護して今は病院ですごしているよ」

「・・・・・・・・ヤプールに攫われた人たちはどうしてるんでしょうか？」

再びメンバーに沈黙が訪れる

誰も何も話すことが出来ない

この世界とは違う次元に居るヤプールには

僕達は何も手が出せない

・・・いや出せる手段があったとしても出せないだろう

なぜならあのヤプールならば确实とっていいほど

人質にするだろう

何も出来ない、ただただ僕達は自分達の無力さに打ちひしがれるし  
かなかった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5113w/>

---

光の巨人に転生したんだが・・・

2011年11月6日00時15分発行